

【報告】

目黒区の「中学生の自然体験事業」

中川 聡

(攻玉社中学校高等学校)

A report on the nature experience activities for junior high school pupils of Meguro Ward in Tokyo

NAKAGAWA Satoshi

(Kogyokusya High School)

【要旨】

東京都の目黒区教育委員会では、夏休みを利用して千葉県外房の興津で「中学生の自然体験事業」を実施している。本報告は、この事業が1999（平成11）年度からは指導者を公募しての実施となったのを機に、筆者が一指導者として参加した際の実践報告である。

中学生たちの参加動機は様々であるが、はっきりとした目的を持って参加している子どももいればそうでない子どもも少なくない。高校生ボランティア達の参加意識は、かなりしっかりしている。こうした中学生・高校生たちをまとめる大人の指導者達のリーダーシップやフォローが、この事業の成否のカギを握っているが、それにもまして海での安全確保には最も注意を払わなくてはならない。事業の内容はもちろんのこと、どのようにして/どのような指導スタッフを揃えたいのか、さらにこの事業の経験・実績をどのように蓄積していけばいいのかという点についても若干触れてある。

【キーワード】

自然体験、臨海活動、高校生のボランティア、施設の有効活用

I 事業の概要

1 これまでの経緯

目黒区の「中学生の自然体験事業」は、夏季期間における興津健康学園を有効活用し、中学生が集団宿泊生活と主体的な野外活動を行い、興津の豊かな自然を直接体験することにより、生命や自然の大切さを認識し、豊かな情操と自主性・協調性・社会性を養うことを目的として始まった。開始当初は目黒区教育委員会内の計画振興課が実施担当していたが、教育施設を用いての教育色の強い事業であるので、5年前からは日頃青少年の利用者が多く若者により近い

距離で青少年向けの事業を多く行っている青少年プラザが実施主体となり現在に至っている。

なお、目黒区の青少年プラザは、区の「青少年センター」的役割を持つ施設で「施設を利用する中での交流や、研修・自主活動などを通じての青少年の健全育成を目的とする施設」となっている¹⁾。

施設紹介のついでに、この自然体験事業で宿泊利用する興津健康学園についても簡単に紹介をしておく。目黒区の案内によれば「肥満、ぜん息などの児童のために、千葉県勝浦市に建設された施設です。環境に恵まれた全寮制の学園で、学習しながら健康回復・体力増進を図り、

心身の育成を目指しています。学習内容は区立の小学校と同じように進められます。(中略)仲間たちとの集団の日常生活を通じて健康・体力づくりが行われ、その効果は特筆すべきものがあります。」とあるが、自然が多く残り、二つの海水浴場にも隣接し、未だ本格的に観光地化されていない興津の小高い丘の上にあるこの健康学園は、中学生の自然体験事業にとっても申し分ない環境・施設になっている²⁾。

ところでこの自然体験事業についてであるが、夏休みで児童たちが帰宅して空いている興津健康学園の有効利用という一側面もあるようだが、上述のように自然に恵まれ、なおかつ目黒区内からもバスで3時間弱という立地であるので、中学生・指導スタッフともに参加者からの評判は上々であり、昨年・今年と二年続けて申し込んだ参加者も多くみられた。

2 ここ二回の概要

中学生の参加者募集は、以前から一般公募制で概ね30人を越えた場合には抽選となっていた。昨年度からは高校生スタッフならびに18歳以上の指導者についても「海浜での野外活動に関心のある方」という条件の下での公募となった。筆者は幸運にも、この公募開始を機に二年

にわたり連続して一指導者として参加することができた。なお、昨年度は高校生スタッフ・指導者ともに5名であったが、今年度は中学生の応募が多かった(当初応募者は41名であったが、最終的に参加した中学生は31名³⁾であった)ので指導者が7名に増員された。

昨年度と今年度の参加中学生の内訳は、それぞれ表1, 表2の通りである。また、高校生スタッフの内訳も、同様に表3, 表4の通りである。

事前交流会が各年3回実施されたが、平成11年度は6月5日, 19日, 7月17日, 平成12年度は6月3日, 7月1日, 22日で、いずれも土曜日の午後に行っている。時間帯は、2時～4時が、団長1名・青少年プラザの職員(昨年度は1名, 今年度は2名)・高校生スタッフ・指導者ならびに看護婦1名(以下「指導スタッフ」⁴⁾と記す)での、本事業の確認および打ち合わせ。4時～6時が中学生への説明・班決めおよび全員での交流となっている。さらにまた、募集要項には記載されていなかったが、事後交流会が昨年度は10月17日(日)に、今年度は9月16日(土)に行われている。

さて、この事業の中身についてであるが、昨年度は8月6日～9日, 今年度は同4日～7

表1 平成11年度 参加中学生内訳

	1年	2年	3年	計
男子	9	6	0	15
女子	2	4	1	7
計	11	10	1	22

表2 平成12年度 参加中学生内訳

	1年	2年	3年	計
男子	14	10	0	24
女子	3	1	3	7
計	17	11	3	31

表3 平成11年度 高校生スタッフ内訳

	1年	2年	3年	計
男子	3	0	0	3
女子	1	1	0	2
計	4	1	0	5

表4 平成12年度 高校生スタッフ内訳

	1年	2年	3年	計
男子	1	1	0	2
女子	0	2	1	3
計	1	3	1	5

日、いずれも金曜日から月曜日の3泊4日の日程で行われている。この四日間のプログラムの大枠は次の通りである。

一日目の午前：バスにて移動(途中一回の休憩)

午後：二日目のデイキャンプの準備または海水浴(於：興津海水浴場)

夜：体育館でのスポーツ(レクリエーション)

二日目の午前：電車にて移動後デイキャンプ

午後：海水浴(於：鵜原海水浴場)

夜：ナイトハイク(肝試し)

三日目の午前：海水浴(於：守谷海水浴場または興津海水浴場)

午後：海水浴(於：興津海水浴場)

夜：花火とウミホタル採集・観察(於：興津海水浴場)

四日目の午前：清掃とかたづけ、土産購入

午後：バスにて移動(途中海ほたるパーキングエリアで休憩)、夕方に解散

なお、二日～四日目の早朝4時には、希望者のみの参加ではあるが、団長の指導の下、興津海岸での魚釣りにも出かけている。

これらのプログラムは、食事や電車の乗車時刻などは、ある程度目安となる時間を予め定めておくが、他の時間帯は当日・その場で・そのときの状況での判断で臨機応変に対応していくことも少なくない。その訳は、自然が相手であることから的確な状況判断により予定の時間を変更することはもちろんのこと、中学生達の泳力や疲労具合を見ながらプログラムの時間を調整するためである。また、夜寝る時間も参加者の自由にしてあり、早く寝る中学生もいれば夜更かしをして友だちとおしゃべりをしている中学生もいる。このあたりは、ややもするとタイムテーブルに縛られがちな学校行事ないしは学校主催の臨海学校などとは大きく違っている。とは言うものの、海での疲労による事故が

あってはならないので、夜11～12時くらいには各部屋や廊下などの電灯は消すようにしている。中学生たちの睡眠時間は、早朝の釣りに行く子どもでおよそ6時間、それ以外の子どもで7時間前後になっている。それでも前日までの疲れが残っているのか、さすがに最終日の朝食の時には、眠たそうにしている中学生・食欲が減ってしまっている中学生も少なくないが、希望者のみの参加ということなので、寝坊するような子どももいなければひどく体調を崩すような子も過去二回にはいなかった。ただ昨年度は、三日目の午前中だけ、看護婦と相談の上で宿舎で休養する中学生が1名いたことも付記しておく。

Ⅱ プログラムの紹介

ここでは、主に平成12年度の実施プログラムを例に、前半(1および2)ではプログラムの決定および終了時のアンケートを、後半(3から5)ではいくつか特徴あるプログラムを、それぞれ紹介したい。

1 プログラムの決定

この事業の中身、プログラムを検討・決定する際には、参加する中学生たちの希望もできるだけ取り入れるという方針のもと、事前交流会で簡単なアンケートを行っている。その結果、今年度は32名の複数回答で、興津でやりたいこととしては、釣り21名、水泳17名、花火17名、キャンプ15名、磯遊び15名、ナイトハイク10名、その他としてビーチバレー2名であった。また、学園の体育館を使ってやりたいことの回答は、卓球15名、バスケットボール14名、ドッジボール12名であった。これらの結果とともに、興津の地理的条件、学園の施設・設備の条件、予算上の条件、指導スタッフの人的条件、プログラム全体のバランス等々を総合的に考慮して決定している。

実際、今年度決定・実施できたものを列挙すると(Iの2とも重複するが)次のようになる。早朝の釣りは毎朝行う。昼はデイキャンプと水泳(海水浴),夜はドッジボール・肝試し・花火とウミホテル採集。希望が多かったが,バスケットボールと卓球は施設と人数の制約から今年度はできなかった。また磯遊びも,興津海水浴場に隣接する磯場が立入禁止になっていたので今年度は実施できなかった。

日程が4日間ではなく,もう一日多い5日間の日程ならば,中学生たちの希望もさらに取り入れることもできるであろうし,より多くの体験も可能であろう。しかし,中学1年生の体力を考慮すると,5日間の宿泊事業は少々きついかもしれない。今後しばらくは,4日間のプログラムをより一層充実させる方針で望むのが,現実的であろう。

2 事後アンケートの結果から

限られた日程の中で行う事業なので,興津の自然をくまなく満喫しているとは言い難い面もあるが,事後アンケートの集計結果(回答は30名)を見ると,デイキャンプ(43%),釣り(30%)などが楽しかったと回答(複数回答)していることから,主体的な野外活動を経験しているといえよう。また,水泳(67%)や釣りの回答から,豊かな自然を直接経験し楽しんだことにより,天候に恵まれたことも含めて,この事業はおおむね成功と言えるだろう。それを裏付けるように参加した中学生たちの評価は,参加して「とても面白かった」と「面白かった」の回答がいずれも47%で,「楽しくなかった」との回答は0人である。また,次回の自然体験事業に「ぜひ参加したい」が67%となっていて「参加したくない」は0人である。

上記の他に自由記入の欄には,「高校生スタッフと普通の友だちのように話せてよかった」,「初めてみたものがいっぱいいた」,「海で

もっと泳ぎたい」などの意見があったこともここに付け加えておきたい。

3 交流的プログラム

中学生の自然体験事業といってもその参加者は,学年別にみるとほとんどの参加者が一年生か二年生で,学校別では,青少年プラザがある地域に近い中学校の生徒の割合が多いものの,目黒区内のいろいろな中学校から普段は知らないもの同士が集まってきている。今年度は目黒区内にある私立中学校の女子生徒4名の参加もあった。そんな状況であるので,他校・他学年の生徒同士でも仲良く知り合えるために,事前交流会でももちろんのこと,お互いに交流が図れる計画・プログラムを前半二日に多く用意してある。もちろん部屋割・班決め(以下「生活班」を記す)でも,いろいろな学校の生徒が同室になるように,くじ引きで決めている。さらに,食事や掃除の当番もこの生活班で行っているし,食事の際の座席もこの生活班でまとまるようになっている。

往きのバスでは,休憩を含めても三時間弱の道りであるが,この間に簡単な自己紹介や指導スタッフの紹介を行っている。また,車内レクリエーションも用意している。このときのバスの座席は予め中学生たちに自由に選ばせているが,孤立しそうな中学生の近くには必ず指導スタッフの誰かが座りときどき声をかけるようにしている。

一日目夜のレクリエーションでは,体育館を利用して,学年・男女の別無く皆でドッジボールを行い緊張をほぐした。身体を思い切り動かし楽しい時間を過ごす,不思議と中学生たちの緊張が解けてくるものである。参考までに書くと,昨年度は参加人数が少なかった(23名)のでバスケットボールを行った。

二日目のデイキャンプでは,生活班が男女別であるのでこの生活班とは別に,デイキャンプ

のための班をあらためて男女混合で編成している。ここでのデイキャンプとは、メニュー決めや食材の購入から調理までを各班ごとにまかせ、全員で常設の竈のあるキャンプ場に行き調理・昼食をとるプログラムのことである。やはり、自分たちで食べるものを自分たちの手で作ることは、良い思い出になるようである。中学生には人気のプログラムとなっている。

4 海でのプログラム

前述したように、地理的条件の良さから、デイキャンプ場に隣接する海水浴場も含めると、性格（海水浴場の広さ、砂浜の質、海水温、透明度、波高など）の違う海水浴場が三種類選べるのは、海というものを知ってもらう一助となる。とくに今年度は水泳の得意な中学生の参加が多く、また浮き輪や浮島等の浮き具を多く用意したので、皆楽しそうに遊んでいた。

また、たんに泳ぐだけ・浮かんでいるだけではなく、他の代替プログラムも一応用意してはある。すなわち、海の生き物に興味のある子ども向けには、スノーケリングや磯遊びを、あまり長い時間海に入っているのが苦手な子ども向けには、砂遊びやビーチバレー・ビーチフラッグなどで対応できるような準備はもちろん、そのようなプログラムに対応できる指導者がそろっているのである。ただし今年度は、ほとんどの中学生は海の中で遊んでいたのも他の代替プログラムはほとんど必要もなく、また天候にも恵まれたので雨天用プログラムを使うこともなかった。

この事業では海で中学生たちに楽しんでもらうことも必要であるが、「海での活動は安全を最優先に考えなくてはならない」ということを忘れてはならない。まず、宿泊する興津健康学園に到着して最初のオリエンテーションでは、自然体験活動に精通している団長から、毒をもつ昆虫や魚などについての注意がある。その他

にも、水泳の前にはみんなで準備運動をする、海への入退水時には必ず人員確認を行う、中学生が泳いでいる近くには必ず指導スタッフがいる、はぐれそうな子・危険なことをする子には注意を与える、等々、これらのことは、指導スタッフ共通の了解事項としておこななければならない。

5 その他のプログラム

上記の他に、二日目・三日目の夜のプログラムがある。二日目はナイトハイクで、三日目は花火である。

ナイトハイクは、葉の予定表にはそう書いてあるだけで、実際には中学生には予め知らせないで肝試しを行っている。とは言うものの、ほとんどの中学生には肝試しをやることが判ってしまっているのが実状である。このナイトハイク（肝試し）は、高校生スタッフの腕の見せ所となっている。大人は高校生たちの計画・実行をサポートするだけである。昨年は興津の町内を歩き大きな寺の墓地まで行って帰って来るというものであった。今年は健康学園の建物の中だけを使い、途中ところどころで驚かせるというものであった。ただ、恐怖感だけをいたずらに助長してもいけないので、一人ではなく複数（昨年度は生活班ごと、今年度は二人一組）での行動とし、さらに昨年度は各班に1台の懐中電灯を携行させた。いずれにしても中学生たちには、恐ろしくもあり楽しくもあり、一つの思い出になったようだ。というのも事後アンケートでは、肝試しが楽しいと回答した参加者は17%でしかないが、次回も参加する場合に肝試しをしたいという回答は30%に増えているのである。夜の暗さを知らない都会の子どもたちには、良い経験になったと評価できよう。

最後の夜の花火は、一見安直なプログラムと思われてしまうおそれがあるが、花火と並行してウミホタルを採集して発光するところを観察

することも実施している。自画自賛するようではあるが、花火を行う場所と時間をうまく利用しているのである。すなわち、花火を行う興津海岸の砂浜には、これも好条件の一つになっているのだが、砂浜の中に栈橋が沖にむかって造られているので、この栈橋からウミホテル採集のための仕掛けを花火を始める前に海中に沈めておく。待ち時間に花火を楽しみ、花火を終えてから仕掛けを引き上げ、採れたウミホテルに刺激を与え青く発光するところを観察するのである。花火の華やかな閃光とは対照的に蒼く小さなウミホテルの発光を見ての中学生たちの表向きの反応はまちまちであるが、中学生たちはもちろんのこと指導スタッフにも感激している人が多い。宿泊体験等でよく行われる最後の夜をキャンプファイヤーで締めくくるのとはまた違った趣・感動がある。

Ⅲ 次年度以降への課題

次年度以降への課題をまとめるのに先立って、事後アンケートの自由記入欄から今後の参考になる意見・課題等を確認しておきたい。

高校生スタッフのアンケートでは、「肝試しのやり方を確認する時間をもっとあればよかった。」「せっかく自然のあるところに来たのだからゲーム機器はない方がいいだろう。」「日焼け対策を持ち物に加える。」「興津の早朝は海と朝日がとてもきれいで気持ちがいい。散歩するだけでもおすすめ。」「飲み物をしっかりとしたい。」「デイキャンプでの火の起こし方、火を起す場所など最初に説明するとよい。」などが次年度以降この事業を計画する際の参考になろう。

指導者のアンケートからは、「スタッフ会でレスキューの実習をした方がいいと思いました。」「夜の活動では懐中電灯を持っていく。」「サンダルはスポーツサンダルのほうが良いという情報を持ち物リストに載せるとよ

い。」「水筒は必要。」「中学生の泳力と体力を見極め、水泳の時間を判断していけばいいと思いました。」などが参考になる。

これらのアンケートの結果や2年続けて参加した経験から、筆者なりに次年度以降のこの事業での課題をまとめると以下ようになる。

1 実施上の注意事項

この紀要の読者の大多数にとっては半ば常識的な内容になると思われるが、大事なことでもあるので、確認の意味でいくつかまとめておきたい。一言でまとめてしまえば「安全第一」ということになるが、ここでは4点ほど確認しておきたい。

一つ目は、夜の睡眠時間と昼間の活動での安全確保の関係である。夜遅くまで起きている子もいれば、早朝の釣りに出かける子もいる。昼間は炎天下の中、海水浴などの野外での時間もけっして短くはない。過度の日焼けも心配である。そんな状況の中での睡眠不足は、やはり好ましいことではない。中学生たちの睡眠時間を少しでも長く確保する方策を考えなければならない。今後、指導スタッフの知恵と腕の見せ所となろう。

二つ目は、海水浴中の悪ふざけである。今年度は、スノーケルに水を入れたり、浮島から泳いでいる子に向かって飛び込んだり、足の届かない深いところで他の人に抱きついたりする子がいた。運が悪ければ、事故につながりかねないことである。つつい遊ぶことに夢中になってしまう中学生たちに、何が危険につながるのか、どうやれば安全に楽しく遊べるのかをきちんと指導する方法を考えなければならない。

三つ目は、火傷についてである。この自然体験事業では過去二回、キャンプファイヤーこそ無いがデイキャンプでの調理や花火では、直接火を扱ってきた。都会生活の中学生たちには（最近では都会生活ではない子供たちもそうかも

しれないが) 火の扱いにあまり慣れておらず、もちろん火の怖さも知らないようである。火を使っているときの悪ふざけには、指導スタッフが充分気を配らないといけないと実感した。

最後に最も重要なことであるが、この自然体験事業に限らず、自然と関わる活動を行う際には自然からのメッセージを素直に読みとらなければならないということである。自然に逆らった事故が毎年どこかで起こってしまっていることは、とても残念でならない。大自然を理解している指導者が細心の注意を払うことはもちろんだが、大人の指導者たちが高校生スタッフや中学生たちに自然との付き合い方を教え伝えていく方策についても、皆で知恵を出さなければならないであろう。当然、この事業でも指導スタッフには、気象・潮流・有害な生物などについての知識が必要となっている。

2 指導スタッフ

本事業の特徴の一つとして、大人の指導者と高校生スタッフを公募していることが挙げられる。公募制に踏み切る当初は、一般公募でどれだけの人数が集まるか心配していたようであるが、「地域の人材活用」などと大袈裟に考えなくても、レスキュー技能や社会体育に理解のある成人からの申し込みが少なくないとのことである。高校生スタッフについても、日頃高校生たちを見慣れているはずの自分の目で見る限り、活発な高校生が集まっており、この点でも余計な心配は不要である。海浜活動に造詣の深い団長の下、指導スタッフが一丸となって取り組んだ四日間の終了後には、ついこの前までは赤の他人同士だった者の間でも、固い絆ができあがっている。過去二回の事業では、理解ある看護婦の参加・協力が得られたことも、事業成功の一因となっていることも付記しておきたい。また事務局としての役割を担う青少年プラザの職員も、昨年度は一名だけの参加でそうと

う苦勞していたが、今年度は二名に増えたので、事務的作業にも余裕が生まれ、さらには荷物の運搬などに自動車の運転をお願いできたので、事業全般の動きに余裕ができた。

ただ、宿泊を伴う海での自然体験事業ということで省みると、これで安心・油断をしてはいけないことは肝に銘じなくてはならない。「海の自然体験活動プログラム^①」によれば水中自然体験を提供するための目安として、以下のようなスタッフを示している。①コーディネーター、②グループリーダー、③健康・安全管理要員、④レスキュー要員、⑤海のプログラムスタッフ、⑥陸のプログラムスタッフ、⑦生活管理スタッフ、⑧障害児サポートスタッフ。水中・海中をどこまでの範囲とするか、あるいはまた障害児の参加の有無による違いはあるものの、上記のスタッフ構成は大いに参考になる。すなわち、目黒区の中学生の自然体験事業においては、団長がコーディネーター役としてプログラム全般の責任者となり、緊急時には的確な判断を下さなければならない。そのために団長には、この事業全体をよく理解していることはもちろんのこと、指導スタッフをまとめるリーダーシップを持ち、中学生や高校生たちの良き理解者であるとともに、大自然のすばらしさと危険の両面が判っていることなどが求められる。高校生たちの活躍は、上記②のグループリーダーとしての役割を十分に果たしている。若い人たちの自然体験に理解のある看護婦あるいは看護師は、③の要員に適任である。今後も④のレスキュー要員の確保は必須である。その他、海で、陸で、宿舎で、それぞれの役割・特技を発揮できる指導スタッフをバランスよく揃えることが、今後の理想の形となる。また、万一不測の事態が起こった際の対応についての共通理解ならびに安全トレーニングは、次年度以降の最重要課題であることを確認しておきたい。

3 中学生の参加意識

参加申し込みのあった中学生たちに事前に行ったアンケートの結果(32名の複数回答)からは、釣りをしたい(21名)、水泳をしたい(17名)、花火をしたい(17名)、磯遊びをしたい(15名)、自然とふれあいたい(22名)という具合に、積極的な姿勢が見られるが、実際に参加している中学生の中には、友だちが行くので何となくいっしょに行くような子、親から言われるがままに参加している子もいなくもない。また、この事業を十分に理解しておらず出発当日まで2泊3日の行程だと勘違いしていた子もいた。指導者への過去3年分のアンケートからも、中学生たちが意見発表の場や行動の場面では、あまり積極的でないことが指摘されている。誰にでも気持ちと行動の間にはギャップはあるものだから、大多数の彼ら/彼女たちの(たとえそれが積極的であるか消極的であるかに関わらず)参加意識をうまく引き出すよう、指導スタッフの力量が問われていると言っても言い過ぎではないだろう。なぜならばこの事業は、学校行事のような好むと好まざるとに関わらず半ば強制的に連れて行かれる全員参加型の行事ではなく、わざわざ参加費を納めた上で応募している希望制の事業なのだから。このような観点からも、ややもするとマンネリ化してしまうプログラムも適宜見直しが必要である。指導スタッフの経験や意見と参加中学生たちの希望とをうまく取り入れた新しいプログラム開発も必要であるし、またその際には団長のコーディネーターとしての役割も重要になってくる。

IV まとめにかえて

参考文献でも指摘があるように、海での教育・自然体験に関する実践報告や活動プログラムは、未だ十分に蓄積されているとは言い難い。また、これらの活動を指導できる指導者も十分に養成できているとは言えない。個人や少

人数のグループが、あるいは目黒区という限られた地域の一部の人たちだけで、勘を頼りに細々と経験を積み重ねているだけでは、この分野での実践・研究もなかなか進展しないであろう。青少年教育に携わる方々が多数関わっている国立青少年センターの研究紀要をきっかけとして、(もちろん海での自然体験にこだわることなく)自然体験活動・自然体験教育に関心のある方々の情報交流がよりいっそう盛んとなり、貴重な経験の蓄積や知見の共有ができればと願っている。

参考文献

- (1) 水中自然体験活動研究会編「海の自然体験活動プログラム」2000
(文部省委嘱「海型青少年施設での安全を確保した新しいプログラム開発研究」報告書)

資料・注釈

- 1) 詳細は、<http://www.city.meguro.tokyo.jp/benri/mg200001.htm>を参照。
- 2) 目黒区の興津健康学園に関しても、<http://www.city.meguro.tokyo.jp/gakko/okitu/index.htm>ならびに、<http://www.bii.ne.jp/~meokitsu/mg090001.htm>にて写真入りで紹介されている。
- 3) 今年度31名参加での収支は以下の通りである。

収入		
参加費	13,000円×31人＝	403,000円
支出		
寝具代	3,000円×31人×1.05＝	97,650円
食事代	6,573円×31人＝	203,763円
保険代	450円×31人＝	13,950円
デイキャンプ食事代		24,967円
電車代		7,812円
雑費		23,858円
		計 372,000円
収入－支出		
	403,000円－372,000円＝	31,000円
返却金		
	31,000円÷31人＝	1,000円

なお、支出の中にある保険は、今年度はスポーツ安全協会のスポーツ安全保険に加入した。またこの他の経費、たとえばスタッフの経費や貸し切りバスの費用等は目黒区の事業予算からの支出になっている。

4) 今年度の指導スタッフの内訳は次の通りである。
青少年プラザ常勤職員1名，社会教育指導員1名に加えて，水泳に堪能な10代女性2名，レスキュー技能を持ち社会体育専攻の20代男性2名，同じくレスキュー技能を持ち区内のプールで監視員として働いている20代女性2名，救命技能を持ち教育学専攻の30代男性1名（筆者）ならびに，海浜活動・地域活動の経験豊かな50代男性1名（団長）。これに，看護婦1名と高校生スタッフ5名で構成される。
また，指導スタッフ内での連絡・指導体系は次の図1のようになっている。

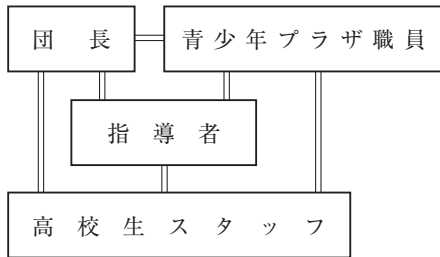


図1 指導スタッフ 連絡・指導体系